

インドの音大で箏が活躍

21世紀に花開く南北アジアの音楽交流——T・M・ホッフマン

東京には「東西線」が一六四四年より走っているが、「南北線」はやっと最近できた。東洋も西洋も、世界の文化や政治を貫く東西の線は古来より話題とされたのに、南北の諸問題は軽視されてきた。和魂洋才はもちろん、和魂漢才も実は（アジアにおける）東西の関係を示す。仏教も、和楽器の原型も、序破急や邦楽の旋律の骨組みも、中国経由で来日したが、その出発点と終着駅を考えれば南北関係は明らかだろう。

日印音楽交流会の活動

一九八九年、東京に設立した非営利民間機関「日印音楽交流会」は、インドと日本を中心にアジア諸国の音楽や言葉による文化との出会いを通じて、文化の相互理解を深めることを目的としている。これまで、日印の音文化にある共通の基盤に関する共同研修や演奏活動を通して密接な交流をはかり、その活用方法などを提案してきた。両国の著名な芸術家や教育家、さらに政府機関および国際企業との協力を得て、インドより日本に三回・計六名を招聘、また日

本からは六回・計十六名をインドに派遣するなど、人物交流を行ってきたことで、「尺八と箏によるインド音楽」や「短歌・俳句とインド古典音楽の出逢い」などの知的かつ実技的交流が公式に認められ、インド最大の州（日本の人口を上回る）、ウッタール・プラデーシュ州から知事賞、そして日本外国特派員協会からデロイ賞が授与された。

私は両国間の音楽文化の融合を目指して、一九八五年よりインドで最古・最大の音楽大学、パトカナンデ音大の五年間師範と修士実技・理論コースに、州文化庁より特別許可をいただき、インド笛パンスリーの代わりに日本の尺八を使って臨んだ。その発想が斬新なこともあって高い評価を得ることができた。その後、インドや南アジア他国の国立劇場やテレビなどで、現地

の音楽家と共同演奏や研修を行い、また日本や欧米諸国での演奏や講演も好評のうちにいった。さらに一九九六年（二週間）と二〇〇三年（三週間）には、インド現地の「日印音楽共同公演・研修旅行」で様々な和楽器が紹介された際、なかでも特に箏がインド音楽の豊かな旋律に適していることが、ラヴィ・シャンカ

ール等の権威を含めて多くの聴衆の耳に届き、理解された。インドの音大に箏を寄贈

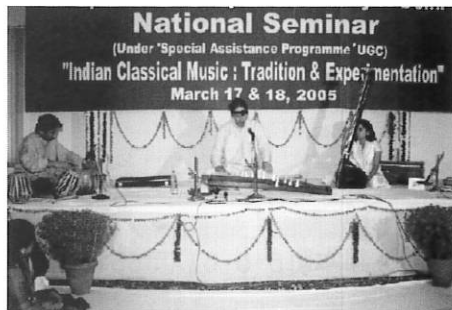
そこで、日印音楽交流では新たに、二〇〇五年より二年間、インドの才能ある若手演奏家や音大生に、日本の箏（十三絃をインド音楽に合わせて活用し、新たな表現を模索してもらおうと、著名な音楽大学四カ所に箏を提供することを企画した。第一期として今年三月六日〜二十四日、私は日本から箏一面を持参し、インドの四都市・一流大学にて、尺八によるラーガおよ



パトカナンデ音大ホール(ラクナウ市)で箏・声・タブラーの演奏



●T. M. Hoffman: 日印音楽交流会会長、天竺尺八とインド古典音楽演奏、音文化研究、武蔵野音楽大学講師(民族音楽学) / 米国出身。尺八を故山口五郎、インド古典音楽をガネーシュ・プラサード・ミシュラに学ぶ。「尺八と箏のためのインド音楽」など日本語・英語・ヒンディー語による音楽資料著作。日印両国の名手による共演で和楽器とインド楽器・短歌俳句とインド音楽の融合CD「INTEGRAL ASIA」監修。



国立デリー大学にて全国音楽祭に出演

び北インド音楽と合わせた短歌の「うたい」と並べて、箏によるインド音楽を演奏した。大きな反響を呼ぶことができた。また、国立デリー大学で二日間、全国セミナー「伝統と実験」に出演し、その学生の反応には圧倒された。新聞などの記事に大きく報じられたことが成功を物語った。箏は最後に、パトカナンデ音大に寄贈した。

今年八月、インドでの演奏・講演と合わせて、パ音大にて国際音楽祭の一環として「箏とラーガ」の研修を開催、またあと箏三面を別の音大に寄贈したいと考えている。二〇〇六年より公開演奏会や放送による発表が予定されているが、それらはインドや日本の各地、海外における発表につながるだろう。和楽器、特に箏の響きをインドに紹介して、アジアの古典音楽の奥深さと新時代の発想を期待したいと念じている。楽器の寄贈あるいは他のかたちでご協力いただける方々のご連絡をお待ち致しております。